

◇講演◇

幼児教育の課題



田 口 恒 夫

私はもともと、整形外科の医者でした。あるとき、肢体不自由児施設という所に行かされました。手足の悪い子どもを親から離して収容し、そこで足が悪い子には手術をしたり、歩行具をつけたら、松葉杖で歩くけいこをさせたりするのです。

幼児教育のことをまともに勉強したことがないので、それだからまた、いい気になって何でもいえるということがあるのでしょうが、だいたい、いつもいろいろと強烈に感じていることがあります。幼児教育関係の人がいるから何かいいことをいえといわれると、夢中になって何かいっているうちにすぐ時間がきて、結局何をいつているかわからないというようなこととにいつもなるので、今日はなるべくそうならないように気をつけます。

〈肢体不自由児〉

最初気持ち悪いと思っていましたが、つきあっていくうちに、その子たちもふつうの子、どもだということがだんだんわかってくるんですね。それはふしぎなもので、みなさんは、経験がないから信じられないでしょうが、つきあってみると実にいい奴で、一生懸命、先生のスリッパが破れているのを気にしてくれたりするような……ね。ごくふつうの、あたりまえの子どもな

んだなっと思うと、だんだんこわくなくなる、気持ち悪くなくなるということがあります。別に、子どもが好きとか、慈悲心があるとか、もともと宗教心があるとかは全然関係ありません。ただ子どもと一緒にいればすぐ慣れてわかってきます。

《言語障害児》

そうしているうちにある時、その所長さんに呼ばれて、『物がしゃべれない子どもがたくさんいるけど、そういう子どもたちをどうしたらいいのか、アメリカなんかでいいことしてるらしいから、見てきなさい』といわれ見に行ったところが、アメリカでは言葉のしゃべれない子どもの問題を相当大がかりに取りあげていて、学校とか幼稚園とか、相談所とか病院とか、どこにも言葉がうまくしゃべれない子どもの専門家がいて世話をしている。しかもそのための専攻課程が、今からもう二十年くらい前ですが、当時、アメリカの百ぐらいの大学にあって、言語病理学専攻課程という特別のコースを、年々、何百人という人が卒業してきて勤める。それは医者やることではないんです。行ってみて初めてわかって、『何だこれは、えらいことじゃないか』ということで、帰ってから本を調べたりしているうちに、だんだんおもしろくなってきて、とうとう整形外科をやめ

て、そっちの方が専門になったりしたのです。

《ろうあ者》

そのうちに、厚生省が聾啞者指導所というのを作って、そこで、言語のことを担当する人がいないからきてくれないか、ということになり、そこに五年ぐらいいました。

初めて聾啞者というのに出会って、そこでまた、いろいろ経験しました。

そんなことをしましたので、その当時の、整形外科的な病気をもってる人が、どんな目にあわされていたかは、身をもって感じましたから少しわかります。それから、肢体不自由児問題は、整形外科で、聾啞者のことも少しわかり、言語障害のことがわかります。

《幼児とのかかわり》

言語障害の勉強をしていると、言葉がしゃべれないという理由で、ありとあらゆるタイプの人が来ます、その中には相当の数、精神薄弱というのがいますし、自閉症とよばれる、いろいろ変わった者もいますし、そういう子どもたちの世話をしてくいて、そういう子どもとつきあって接するという面から、わかる

ことはわかってきます。すると、どこかに「幼児教育」というのに何となく接してくるんです。

『ああ、この子、もし幼稚園にはいれればなあ』と思って、一緒に幼稚園に話しにいったりすると、バサッと断られるということを体験するんです。

こっちはいいと思って頼んでいるのに、むしろはよくないといつて『やるのは私だから、いくら先生がいいといつてもダメです。私が一番よくわかっているんですから』といわれて、まあ仕方がないと思って、あきらめることもあるんですが……。

もう一つ不愉快なのは『この子がいってけると他の健全な子どもの、のびるべきものに手をかけてのばしてやれる手がとられるから』他の子どもの成長がこの子のために阻害されるという……。その上にもう一つあるんですが、『そういうことをして、この子どもをいってうけ入れると、他の健全な子どものお母さんが、ああいうおかしい子どもを入れる幼稚園に、自分の子どもは入れたくないという気持をおもちになると、PTAなどであるさいのでダメだ』と、それで結局ダメでダメだからダメだ、という訳ですね。

おもしろいことに、全然そんなこと知らずに、最初、入園テストで先生がうっかりして、その子を入れちゃった、という場

合にはいいんです。

うけ入れる側は、一たびうけ入れて「ウチの子」になると、おかしいけどいいところもあるということがわかる。

こういうことが幼児教育と、子どもの仕事の接点のおもなものです。ですから、いい印象なんでもっていませんよ、幼児教育というのは、著にも棒にもかからないものだ、いつも思っていますし、それよりもっとひどいのが学校だと思っています。

皆さんは、そういう子どもたちの世話が職業じゃないんですが、それぞれの子どもの原点にたちかえって考えなおしてみるときには、そういう子どものことを考えることも参考になると思っています。

〈今までの対策〉

そういう子どもたちに何がされてきたかといいますと、今申しあげました整形外科的な病気に関しては、たとえば、股関節脱臼というのがありますが、昔は「エイやっ」と整復して、こういうふうに固めて、ひどい場合には、半年から一年そのままにしておくんですね。そして、一年ぐらいギブスで固めておきますと、今度はどうしても動かなくなってしまうんですね。そし

て、それをなおすのに、少なくとも一年半かかる。一年半かかって、足がこうなっちゃったのが、まっすぐになって歩けるようになるのもう大丈夫かといいますと、そのうちの約八〇パーセントが、あんまりギューとおさえつけておいたので、骨の頭の一部分が死んじゃって、あと一生痛かったり、まがらなかつたりして不自由を重ね、おとなになってから神経痛がおこる。トラブルがおこらないという人は、ほんの一、二割しかない。何でそうなったかといいますと、医者が治療したからです。

治療をしないで放っておくかどうかといいますと、ただ頭が上がつたりひっこんだりするだけで、あとはあまり不自由ないんです。ところが医者が治療すると一生苦しい思いをする人が、治療した人の半分以上いたということは昔からわかっていたけど、やはり、それがいいような気がしてやってきたのを、ごく最近になって「治療っていったい何だろう」と考えなおしてみたら、そんなことをしないで、もっとまともな方法があるんじゃないか、子どもにも痛い目にあわせないで、親も苦労しないで、しかも股関節が直ってくるようになれば……というので、近ごろは、大変うまい方法が開発されて、今は全くギブスをまきません。ただ、子どもの足を首からつるような状態にして、自由に動きまわることによって、足を動かすことによって、

股関節がよりよくできるような状態にするのに、ほんのちょっとした手だけ加えれば、子どもが成長する力によって股関節がなおってくるという画期的な治療法が開発されて、これから先はもうギブスをまかれなくなりました。

そういうふうに、整形外科技術は、医者の思いつく範囲では、非常にゆっくりではありますが改革されています。

〈肢体不自由児施設〉

そもそも、肢体不自由児という名前は、手足がふつうの子どもの機能と著しくちがっていることを総称してこういうのですが、その大部分は、脳性まひという子どもたちなのです。脳性まひの子どもたちを社会がどう遇してきたかという過程をふりかえてみますと、昔は放っておいたんです。だいたいは、お母さんが一生懸命世話しても、三つになっても四つになっても歩かないし、物もいわないし、どうもあんまり立派な社会人として社会にたっていきそうにないので、なるべく近所に知らせないように隠そう、隠そうとしてきた訳です。隠そうというのがおもな処遇のしかただったでしょう。

それがだんだん隠してばかりいないで、その子たちにも手を加えてやると、ずいぶん不自由な手がよくなる面があるという

ことが宣伝された時期がありますね。それがだいたい、大正の終わりから昭和の初めころでしょう。その結果、どうなったかといえますと、肢体不自由児施設という、そういう子どもを收容するところを作って、そこで治療とか訓練とか、できる範囲で保育とか、教育ということも、そこで行なえるというような施設を作るべきだという動きがあつて、児童福祉法ができた時には、肢体不自由児施設という名前ができて、そういうものを各都道府県に作らなければいけないという形で法律ができて、今まで目の目をみなかった子どもたちが、施設にはいれて、手術をうけられるし、訓練もうけられるし、場合によっては保育者もついてるし学校教育の対象にさえしてもらえということになった。

〈施設と子ども〉

それをきいてみんな喜んだ訳です。一番喜んだのは親ですよ。それからそういう仕事をしたいと思つていた、ごく少数ですが整形外科の医者たちが喜んだし、厚生省のその当時の局長とか課長とかは、そういうものを作ったことが自分たちの業績になりますから大変に喜んだし、新聞とか、ラジオ、いわゆる報道関係者は『明かるい世の中になったことは結構だ』と喜ん

だ。それから、地域婦人会も喜んだ、不賛成なんていない、全部賛成です。

その時、おそらく最も大きく不賛成だったかもしれない人は、子どもだったんですが、子どもというのは辛い何もいませんから、どんなにひどい目にあつても皆が喜んでいれば我慢しますね。幼稚園の子どもだってみんなそうで、子どもは『われわれの人権が正當に保障されていない疑いがある』なんてことは決していいませんから、公害の水銀飲んで死んじゃった人とか、幼稚園の子どもとか、肢体不自由児とか、盲とか、聾とか、みんなそうで、自分のことをいわない性質の人たちです。いう人が全部賛成だったら絶対多数で可決されますね、そういうふうに、可決されて、肢体不自由児施設ができた訳です。

〈施設の悩み〉

法律できめられたらパツと全国でそういう子どもが集められて……その前に、まず敷地が決まつて建物が先にできるんですね。次に園長が決まる訳です。そして園長のお気に入りの職員が集まつて職員会議をして、その結果、どういう種類の子どものとつたらいいかという子どものわくをその人たちが決める。そして、たくさん応募してくる子どもの中で、一番入れてもら

いたい子どもは、職員のお気に召さなくてダメ、中ぐらいで、本当ははいらなくてもいいような子どもだけがはいってくる。

それでもはいってきた子どもは、肢体不自由とか、びつことか、かたわかと思えないほど、ワアワア、キャアキャアやってるんですね。だから子どもだけ見て『うちの園はやっぱ意義がある』なんていうんですよ、幼稚園もきつとそうだと思いますが、子どもなんておとなさえないなければ、みんな楽しそうにしているんですよ。それを『自分たちおとなが建物を作ってやったから、楽しそうにやっている』と想ったりいたりしても、子どもは『そうじゃないんだよ。おれたちは子どもだから楽しそうにやっているんだ』なんていいませんからね。みんな施設の業績になって、大変はやって、肢体不自由児施設がいっぱいできちゃった。もう施設にはいる人がいなくらいたくさんできたんです。

どうしてはいる人がいないかといいますと、職員に都合のいい子どもをとろうとするでしょ、そういう子どもは、必ずしもそういう所へはいらなくても、必要なサービスがうけられるようになりつつあるんです、一方で。

〈通園センター〉

これは進歩だと思いますが、幼稚園に行くのと同じように通園センターといって家から通って、しかもマイクロバスで迎えにきて機能訓練をうけたり、そこにも保育者がいて、楽しく保育がうけられて、一日おきにふつうの幼稚園に通っている。よく見ると、昔だったら当然、肢体不自由児施設にはいったくない、肢体不自由なんだけど、今はふつうの友だちもできて、近所の子と、その子なりにできる役割であそんでもらって楽しくやっているの、『肢体不自由児施設にはいりなさい』とすすめて行っても『いやあ、いいですよ。そんなに遠くまで行かなくても間にあっていますし、訓練はあそこで受けていますし、お医者さんには定期的にみてもらっていますし、今やっど幼稚園にいらしてもらって、火、木、土は喜んで行って、連れて帰るのがなかなかむずかしいくらいですから……』という訳です。園がつぶれるなどということは天下国家の一大事ですから、園長以下、何とか、一生懸命子どもを集めようとするのですが、子どもの方が来ない、というふうに、肢体不自由児施設も少しずつ変わってきています。

〈隔離収容〉

収容施設にいる子どもが、どういふことを望んでいるかとい

いますとね、まず、まっ先に家へ帰りたいといいます、中でも、親が面会に来る子どもと、来ない子どもがいると、来ない子どもは、つまらないという意識が非常に強いですね。子どもは、お腹がすいていることが最大の悩みではなくて、家へ帰りたいけど、退園まではあと一年とか、一年我慢しなくちゃいけないとか、ちょうど、無期徴役よりは少し短かい刑期を、半分終わったから、あと半分つとめれば満期になるんです、といった囚人に会った時とよく似ています。いうことが……、何だか悲壮な感じですよ。

なんでその子がそこにいるかというと、主として、施設の都合と家庭の都合でいるようです。ね、施設のケースワーカーの人に、『なぜこの子を家に帰さないか、家の近くにも通えるところがあるじゃないか。なぜここへ親からひき離しておかなくちゃいけないのか』といいますと、『この間も、ケース会議で、帰そうかということが出たんですけれども、お母さんのご意見をうかがうと、もうちょっとおいておいていただけると……。今、私も勤めに出始めたばかりですし、お兄ちゃんが喘息で時々病院に通うので、弟が帰ってくると大変ですから、もうちょっとおいていただけると家としても助かるので……。』ということ。『両方とも大変結構なのでおいてあるだけで、子どもは結構でな

いのにそこにいる訳ですね、そういうことがあるので『こういうことをしていると今に施設そのものが危なくなってくるのではないか、われわれは、こんなことをしていいのかね』という不安を職員ももっています。

〈ろう児〉

それから、その次の、聾啞者に対してどういう対策があるかといいますと、昔から聾啞者対策のしつかりしたものは、義務教育です。これは歴史が古いからご存知だと思いますが、義務で定められていますから、聾学校は大変繁盛して、全国の都道府県に一つ以上あって、聾だということがわかったと県立聾学校へはいり、県立は県に一つか二つしかありませんから、学校に行く年になると親から離される訳です。聾というのは、人のいうことはよくわからない、だから、世の中の人やたらに早く動いちゃって、勝手なことを勝手に決められてどんどん進められて不愉快であるという状況ですから、一生懸命、人の顔つきをみながら、しゃにむにくつついていこうと六年間も努力していると、ふつうの子どもとはパーソナリティが違ってくるんです。それは当然だと思います。

そういう子どもは、一番親を必要としている子どもなんです、まだ親から離れたんじゃやっていけないという子どもたちで、いきなり小学校教育をするなんて、子どもの方から考えたら理屈に合わないのですけれども、そういう、一番、親を必要としている子どもが一番早く親から離されて寄宿舎へ入れられる訳ですね。

〈盲児〉

盲児なんかの場合はもっとひどくて、六歳なんて、お母さんが育てていると、一人でお便所にも行けないし、お風呂にもはいれないし、着物も着られないし、食事も一人ではおぼつかないという盲児が多いんですね。この子は、目が見えないからごはんがどこにあるかわからない。だから自分が食べさせてやるより仕方ない、といって、しろうと考えてやっていけば、どうしても、お人形さんの世話をするように育ててしまうことになるんですね。ですから親としては、本当は、『親から離せません。私が世話しないと、この子は生きていけないかもしれない』という不安のある子どもを、盲学校長が迎えに行つて、『お宅の子どもは盲だとわかってるから、県立盲学校に入れるからよこせ』という訳ですね。『入れないと義務教育法で親を罰するぞ』

というようなもので、親はどうしようもないから『弟の方が幼稚園にいつていてわりあいしつかりしてるから、こいつを連れてつてくれ』なんてね……。それくらい、今の状態からすると親のそばにいなきゃだめだ、というのを真先につれていく訳ですね。

〈精神薄弱児〉

精神薄弱児に対してどういうことをやってきたかということ……親が『うちの子どもはどうも三つになってもおしめがとれないし、近ごろ歩き出したけどまだヨタヨタしているし、あんまり言葉もいわないし、時々奇声を発するし、よそのうちのものとしてきちゃうし、こういうのどうなんでしょうね』といつても誰もなにも助けてくれないんですね。近ごろは『助けます』という人が出てきたという点では少し違ってきますが、それでも六歳になるまでは、なにもしてくれないんです、親が相談に行けば、あちこちで拒否される。幼稚園はダメです、施設に入れるのもダメです、といわれて、格別そういうことの教育を受けていない人が、どうしていいかわからなくて、全責任を負って家庭で保育している。よほどちゃんと勉強した人でも保育がむずかしいかもしれないような子どもは、一番教育のない親

が保育しようという訳です。親なんかなくなつて育つような利口な子どもは、優秀なる保育者が国立幼稚園でご指導申しあげている。現体制はそういうふうにできていますから、誰も世話してくれないでしょう。

『遅れてはいるかもしれないけれど、皆と一緒に遊ぶチャンスだけは与えてもらいたいから学校へ入れてもらいたい』等という、学校の方で『来ちゃ困る』という訳ですね。『義務教育だから来たんだ』という、教育委員会の方が困つて、『就学猶予願い』というのを出してもらえないかね』という訳です。やっと免除願いや、猶予願いに抵抗して入れてもらうとどうなるかという、特殊学級や、養護学級という特殊なものに入れられる訳です。寄宿舎なんかに入れられていたずらをしたといつては叱られ、便所をよごしたといつては叱られ……ということをくり返してやっていると、だんだん人柄がおかしくなってくるんですね。それで、おとなになつて本当におかしくなると、精神薄弱というのは本当におかしいというんです。

《今までの特殊教育》

精神薄弱とか肢体不自由児とかを教育する分野では、特殊教育といっているんです、特殊教育という箱を作つてそこに入れ

て、今まで行なわれてきた特殊教育というのをやっているんですが『今、やっていることが、おかしいんじゃないか』という人があんまりいないんです。子どもは何にもいいませんからね、新聞社なんかが見にいてもね『いや、ずいぶんひどい子どもに、熱心に行っていますね。辛抱強い人でなきやできないんでしょう』とか『根気がいりますね』とか『ご苦労さんです』とか、たいがい感心して帰る。たいがいの人は『大変熱心にやっています頭が下がりました』なんていいますが、よくみると、子どもだけあんまり感心していないことがとても多いんですね。

特殊教育というのが、もともとなぜできたかという、たとえば『耳が遠いとか目が悪いとか、知恵がおくれている子どもは教育しなくていいんですよ』という、非常にあたりさわりがあるんです、だから政府としては『何かしています』ということにしないとおさまりが悪いので、何かしていますということにするために作るんです。

《学校》

もともとふつうの子のための学校というものがあるでしょう、これが問題なんです。それは、国民の子どもを国家目的に合わ

せるために政府が作ったもので、非常に国家権力的なものなんです。みんなそういうことを忘れちゃうんです。自分もそういう学校を出てきているし、自分たち自身は相当まともな人間のような気がしているんです。ああいう学校へ行ったおかげで、私は今、算数も国語もできますし、みんな忘れたけど、地理や社会も歴史も一応習ったと思っています。それが今の生活にどれほど役立ってるかわからないような気がしているんです。実際には、まるで役になんかついていないんですよ。

皆さんのころにはそれでもよかったけれども、今幼児教育をうけている幼児は、二〇〇〇年代になった時、その社会に適応してそこで生きがいがあるくらしをしていかなきゃいけない連中ですね。その連中が、今の算数を知っていてどのくらいいいことがあるかという、あんまりいいことないんです。子どもに何を教えるべきだという専門家ではありませんが、少くとも次のようなことは事実です。今学校で教えられていることの内容の根本は、今から百年前に決められたものです。それをやっている、おとなになった時、産業人として立派にやっていくのに役にたつ、それに、もう一つは戦争する時の兵隊ですが『右むけ、右』といった時、パッと右向く人は、学校教育をうけてきた人の中に一番多いんです。学校というところは、軍隊に準じ

ていろいろやってますから。外国にせめ減ぼされるのはたまらないというのと、生産がおいつかなくて、食べ物がなくて、のたれ死にするのは困る、という二つの恐怖心が幽霊のようにいつでもつきまとっていた時代に、今の学校はできたのです。病氣と飢餓と、戦争に負けるのは困る、それからのがれるためには全力をふりしぼって国民一致団結して、国家の方針に協力しなくてはいけない。親も子も、おじいさんもおばあさんもそう思っていた時代にできたのが今の学校です。

もともと人間を育てるという思想でできたものじゃないんですね、普通学級っていうものは。国民全体を集めてできるだけ国の方針にあったことを、徹底的に教えこむことが必要な時代だったので、平均的な子どもをの頭において、建物とか設備とかを作る訳で、全国どこへいっても、小学校の子どもの机やいすは小さくて同じにできているんですね。子どもが大きくなっても明治時代とあまり変えないんです。校長先生なんて全然勉強しないのに、あんなに大きな机で、一日八時間勉強する生徒が小さな机で……。私なんか、あんなに一日六時間も勉強したことは、学校卒業以来一度もないですね、一年生とか、二年生の小さい子どもがよく耐えていると思います。学校でやっていること自体が、根本的に反人間的で、非人間的で、おかし

いんじゃないかと思わなくなっちゃうように頭が汚染されているんです。学校を出たからですね。そういう中に、著しく大きな個人差をもった子どもが来ると、来られた方が困っちゃうということがあるんですね。だから拒否したりする。何にもしないでおくのが一番いいけど、何にもしないでおくと、教育は国がするといっておきながら、いかにもそういう、全然、何もいない子がいるではないかという意見があつたりするので、しょうがないから、平均から少しはずれた子どもがバラバラいる中の平均的な子どもをつかまえて、聾教育とか、盲教育とか、肢体不自由児教育とか、精神薄弱児教育とかいう、特殊教育諸学級というのができた訳です。これら私どもが世話する子どもが、どういう教育的処遇をうけてきたかという事の流れですよね。ところが、おもしろいことに、そういう子どもたちの教育の中で『これは変だ。そうしなくてもいい、こういうやり方もある』ということが、いろいろ出てきているんです。これから、いくらか希望的なことを申しあげます。

〈考え方の変化〉

まず肢体不自由児に関しては、『肢体不自由児は、肢体が不自由でも、その子を中心に考えると、もっとふつうの子どもと

遊ぶ機会が多、方がいんじゃないか』ということをいう人が、ぼつぼつ出てきた。もう一つ大事なのは、肢体不自由児をやたらに訓練して、少しでも軽くして、歩けない子は歩けるように、立てない子は立てるように、しゃべれない子はしゃべれるようにして、生産社会に適応させる、社会復帰させて社会のお荷物にならないようにしよう、適応させるんだ、リハビリテーションをするんだという考えが強烈にあつたのが、少し変わって、今度は何が出てくるかという、『そういう考えは、おかしかつたんではなからうか』という反省なんです。

前は、もっぱら社会復帰とか、身辺自立とか、経済的自立とか、社会適応とかを、一生懸命そのためにやっているんですけどいうふうにいっていたんですが、少しずつ、人間を大事にしようという考えにたち帰ろうとか、民主主義ってそういうことだったんじゃないからうか、という考えにたち帰ったところが、社会適応なんていう考えがおかしいんだ、現在の社会、ちょうど普通学級が一つの社会ですが、これに適応させるのが目的ではなくて、その子どもの成長のためになるように、社会や普通学級を変えることも考えなくちゃいけないんじゃないか、ということが、だんだん気付かれ始めてきたんですね。

《発達保障》

文部省や、厚生省が、社会復帰とか、経済的、身辺的自立のために、あらゆる手段を尽しても、ということなんだんいなくなってきた、そのかわりにどういう言葉が使われるようになったかといいますと、一つは「発達を保障しよう」です。

発達を保障するというのはどういうことかという、その子のもっている成長の可能性があるなら、それを全面的にのびるまでのばしてやろう、どこまでのびたかなどということは、問題にする必要はないし、最大限のびたところで、社会的、経済的自立ができるかどうかを問題にすべきではない。生産社会にどれだけ貢献するかなんていうことによってその人の価値が決まるのではない。むしろ教育というか、保育というのは、その子のもっている能力がどこまで伸びただけが問題なんで、伸びた結果が、IQいくつかなったかなんていうことは問題ではない。60なら60でもいいけれども、その人のもっているものが充分のびて60なら、ちょうど120の子どもが120であるのと同じくらい、すばらしいことなんだ、という見方ができなくちゃいけないんじゃないか。そしてむやみに社会に適応させるとか、経済的に自立することが最終目的とかいわなくなった。そして、

子ども自身をもう少しよく見て、特定のこの子の場合には、どうしてやったらこの子の成長のためにいいのか、という考えにたつてあらためて学校を見直すという動きができて、したがって、肢体不自由児施設がだんだん下火になってきて、一方で通園センターの数がふえてきました。

《不自由児の保育》

そこで何をするかというと、ほんのわずかの治療と称する訓練や、お医者さんの診察もありますが、大部分の時間は、保育者がいて、そこで他の子どもとのつきあい方とか、他の子どもとの遊び方とか、自分とちがった種類の子どもとつきあうチャンスを与えている。この、チャンスを与えるというのが、今、通園センターの一番大きな貢献でしょうね。家にいると誰も遊びにきてくれないし、外へは出ていく力は自分にはないという子どもたちに、他の子どもと共に遊ぶ機会が、初めてそこで与えられる。そこで成長した子どもが、パートタイムでふつうの幼稚園へ、月、水とか月曜だけとか行つて、だんだんふつう学校に適應できるようになっていく。そうすると、そういう子どもが、普通学級へはいっていきます。幼稚園で一緒の仲間を通ったんだから、ふつうに一番近い学校へ入れたらいいとい

う人がだんだんふえてきて、校長なんかは、県立の養護学校があるからといってすすめたりするんですが、『うちの子は足が悪いので、一番近い学校がいいんです』という、もったいなことでしょう、昔は足が悪いと、一番遠くの学校へ行ったんですが、こうして、ふつうの近くの学校へはいる。

《障害児の入学》

そこでどういうおもしろいことがおこるかという、その子と一緒に幼稚園にいた子どもが面倒みるんです。先生は、はじめ、そのということがわからない。先生は『困っちゃったねえ、変なのが来たねえ』と思っていると、他の子が『あのね、あそこへスリッパおいできたっていつているんだよ』なんていつてくれる、『あっそう、じゃあいつてきなさい』なんて、生徒に教育されて、だんだん先生もわかるようになる、すると職員会議で『あんな変なのを入れたのは誰だ。校長がうつかりしてたんじゃないか、あぶなくてしょうがない。もし事故起こしたら誰の責任か』なんていうのがあると、担任の先生が『だいたい大丈夫そうです。二ヵ月たっていうこともわかるようになりますし』というように弁護する側にまわるんですね。

鉛筆を落とすといっても、落とせば他の子が拾ってくれる、

もうそういう間柄ができていますから、そのために先生や他の子が迷惑するとか、PTAが何とかいうということが、だんだん通らなくなつて、今や乳母車にのつて通つてくるものもある。

やつてみると結構、何とかうまくいくのが多いんです。近所の子どもが乳母車にのせるところから手伝つて、学校までおしてくる。足をひっぱる係とか、もうコツがわかつていて先生なんかよりうまいですね。結局、地球家族の仲間なんですから。

つきあい方なんていうのは、つきあっていれば、いろいろ出てくるんです。昔は、こういうのは例外だったんですが、だんだん例外じゃなくなつて表に出てきました。肢体不自由児という名前を与えられて、特殊児童になつちやつていた子どもが、必ずしも特殊でなくて、結構、普通学級の中で、その子なりの役割を与えられてやつてゐる。相当変わったのがいて、一緒にいた連中もずいぶん勉強しているんです。その子がいなかったら思いもよらなかつたことを、いろいろ学ぶことができて、少なくとも、その子どもたちが将来、市議員になつても『肢体不自由児は殺しちゃえ。その方が社会のためだ』と誰かがいったら『うん、それはいいかも知れないけど、〇〇君はダメだよ。あれは僕たちの友だから』ということになるでしょう。それが、人間同志のつながりであり、政治に血が通うとかいうことだと

思います。こうして、普通学級に外からはいってくる人がふえてきたんです。肢体不自由児とか難聴とか、聾ですね、全然きこえなくても普通学級にいてる子も結構いるんですよ。

〈ろう児とのつきあい〉

昔だったら、当然聾学校へ行つたくらい、耳が遠くて、ふつうの幼稚園とか小学校へいってうまくやっている子が、それはたくさんいます。うしろから『○○ちゃん、お弁当もってきましたか』なんていっても返事しますよね。そうすると先生は、無意識的に、うしろから肩たたいたり、ゼスチャアをしたりするんです、クラスの連中もみんなそうです。『○○君、わかるよ。言葉だけでわかってるよ、じゃ、ウサギにえさやれっていってみようか』なんていって『○○君、ウサギのね、ウサギのえさやって』というふうにいますよね。するとその子は行ってえさをやる。『ね、やったでしょ、ちゃんとわかってるんだよ』そういうもんです。それが人間と人間のつきあいですから、相手がたとえば西洋人であつたりしてもそうですね。むこうがわかるようになったんじゃないくて、こっちの接し方が変わるんです。そして何とか通じたい、という気持ちが先にあるんですね。あつて、つきあおうと思つてさがしていると、両方で合うとこ

ろがすぐ見つかるんですね、その合うところをみつけようとするのが人つきあいでしょう。

耳がきこえたつてそうですよ。両方が通じあう道をさがそうと思つてると、どこかあたるでしょ。そうすると、どっちも相手がよくわかると思うようになるんですね、それを、初めに難聴とか、精薄とか名前をつけちゃつて、これはダメらしいよなんて思つてると、つながりようがないですよ。そんなこと知らないでつきあつてると、その子とつきあう時はこうするといふというような、言葉ではいえないものが、すでにできているんですね。子どもは、先生よりしばしば早い、そういうチャンネルをみつけ出す力があるんですね、そういうふうにして、みんながつきあつて、しかもそれぞれの子どもにとって一番のびやすいようにしておいてやる。それが保育の目的にかなっているとするば、特殊学校や、特殊学級や、施設を作つて子どもを分けたりすると、ますますその子たちは、その仲間の子どもとしかつきあえなくなつちゃう。学校というのは、そういう点では、非常におそろしいですね。

〈ここらことば〉

言葉というものは、だいたい気持ちが先に通じていた時に、は

じめてわかるんです。外国語でもそうです。言葉だけきくと、慣れない人はわからないですね、以心伝心といいますが、気持ちを通じような心のむきあいとか、つながりがない時には、いったことは通じません。難聴で、相当ひどくても、あの子が好きで、あの子と〇〇して遊びたい」という気持ちが先にあると、その子と遊んでいて、その子が『ダメだよ』なんていったその言葉がパッとわかるようになって非常に早く、言葉の理解ができるようになります。他の子と遊んでいると、理解がのびる訳ですね。

しゃべらない子がいても、その影響をうけて、しゃべる方の子がしゃべらなくなるということはありません。こうして集団の中にいると、子どもにとっては、いろいろな点で得をする。そして、集団で遊ぶことを覚えると、どんなにいじめられても、通じなくても何でも、外へ行く子になるんですね。脳性まひの子でも、ふつうの学校を卒業した吉田さんという奥さんが『子どもの時、いじめられませんでしたか』という間に答えて、『いじめられても、いじめられても、それよりもっとおもしろいことがあったから、出ていくんですね』ということをいっていましたが、やはり他の子と遊ぶ方がおもしろいでしょう。

〈変わる学校〉

こうして、六歳になって学校へいくようになると『この子は聾学校へ行かなくちゃダメです。90デシベルですからね』なんていう人がだんだんなくなってくるんですね、聾学校は定員がへってきていますが、今、耳の遠いとわかった子どもの家を家庭訪問する教師をプールするところを、聾学校にするとかいうことを考えています、イギリスなどでも、聾学校の先生は、籍だけは聾学校においておいて、家庭訪問をしたり、普通学級にいて、そこにいる聾児の面倒をおもに見る副担任になったりする動きができています。文部省でも、おそまきながら『今までやってきた特殊教育はどうやらおかしかった。だから、これから特殊児童がいても、なるべく特殊視しないで、特殊学級を作っても、ふつう学級の子どもと一緒にさせなさい。聾学校どもとして、できることはできるだけ一緒にさせなさい。聾学校が、隣の学校と運動会を別々にするということをしないで、なるべく共通のプロジェクトに従って、一緒にしなさい』というおふれを出したりしています。ですから、そのすじは、ちよっとちがうかもしれないけど、いろいろなところから従来の体制が変わりつつはあるんですね。

《変らない学校》

しかし一番くずれないで、一番厳然としていて、一番どうしようもないのが、普通学級です、従来通りの形をそのままとっていますね。そして、子どもがくる前から、やることを決めておいて、一人一人の子どもをよく見て、その子の成長に役立つことをその場で考えていくという姿勢が全然ないですね。幼稚園だって、ところによっては、九時から三時まで、安全にけがさせないように帰すというだけで、ピアノがポンとなったらピンと立って、ポンとなったらおじぎをして……ということができないと人間じゃないように、三歳から徹底的にたたきこんで、子どもが裏山へ逃げたりすると、親をよび出して叱ったりする人がいるという、うわさをきくことがあります。

こうなると、まさに小学校に準ずるようなもので、せっかくなおにのびそだった子どもが、幼稚園をいやがり始める。子どもは幼稚園にいくくらいなら死んだ方がいいと思ったりするということはありうるんです。なぜありうるかというと、結局は、その子どもに即して、その子どもの成長をはかって考えるのではなくて、幼稚園や学校の方針に子どもをはめていこうとするからです。それにうまくはまった子はほめて賞を与えて

のばし、うまくはまらなかった子は、たたいてでもはめていこうという姿勢があるのです。それが子どもの発達をずいぶん阻害していて、さらに、世の中全体に影響していると思うのです。が、世の中の人々がそれに気づかなくなってきたということがあるんですね。

《子どもに即した教育》

私は、子どもに、言葉を教えることが職業ですけれども、親が子どもに言葉を教えていると、非常にうまく子どもが覚えていくんです。親が子どもに言葉を教える時には、いつでもそのプログラムの主導者は子どもの方で、親は、その場で教え方を覚えて教えているということです。

たとえば、子どもがうれしそうにしていると、『ウーンうれしいの』とうれしそうにしているのを見て親がそういうんですね。カリキュラムみたいのは全然なくて、子どもが、病気などできげんが悪ければそのままにしておくし、子どもが『ア、ア、ア』というと、そちらを見て、『ああ、時計あるね、カチカチ』なんていうように、何を教えるべきかということとは、だいたいにおいて、子どもが、その時の調子で指定しているんですね。親はその指定を一生懸命察して、子どもが納得するまで、その

ことをせっせといっていくという場面が、意外に多いんです。あれがもし、小学校と同じように、二歳児には何を教えるか、順番としては何がいいか、日本語教育としては、平均、週何時間が適当か、時間帯としては、午前九時から十時の時間帯がよろしい、なんていうきまりがもしあったら、おそらく95%の人は、おとなになっても、日本語をまともにしゃべれなくなってしまう、これは見通しとしては相当はつきりしていると私は思っていますね。

そういうことから考えても現在の学校というのは、非常に非人間的にできていて、子どもの成長を保障する機関というふうにはとても考えられない。子どもの発達を保障していくために必要な措置をとれる体制になっているとは、とても思えない。西暦二〇〇〇年代の社会に適応して立派にやっている、そしてその社会を今のわれわれの社会よりも、もっと地球の上に住んでいる地球家族、地球社会とか、地球上の生物がみな、より生きがいのある、よりよい生活をしていくために、今の子どもたちを、どう育てたらいいかなんてことを考えると、何だか、早く学校だけはつぶしてしまわなければ……という気がしてくるんです。何しろ、あのコースをずっとたどっていくと、休み時間と体育と給食の時間以外は、我慢して、そして中学にはい

って三分の二の人にわからないような教科をまたずっと三年やって、高校にはいると、あれよあれよという間に大学の入試で、それにおこちたら人間でないようにいわれるということを知っていて、やっと大学にはいると十八歳でもう、ガクツとして、何しにきたのかわからない、というのが多いんです。

〈改革の方向〉

だから何とか、今の教科というのをやめて、大幅に変えられないものかと思えます。算数の中味を変えよとか、国語なんかよしちゃうとか、そして学年なんていうのはやめて、小学校とというのは、いかなきゃならないけど、いつ来てもいいです、というようにして、一年たったら二年なんていうのではなく、勉強の内容そのものの、たとえば、算数なら算数についてだけいうと、興味があって、やりたくて、おもしろいなあと思い出したら、新しく物を習うことくらいおもしろいことはないですからね、夢中になって半日やっていたら、ふつうの学校の一学期分をやってしまったなんていうプログラムが今にできます。一番おもしろい休み時間のあとに、いつてみたら数学で、ねむいなあなんて思っていると、微分の第一課が終わっていて、その次にいったら、もうわからなくなつて、結局学校で何を習ったか

というと、微分やつてもおまえにはわからないということだけおそわったなんて……。誰も、やればおもしろいなんて教えてくれないんです、現に〃やったのにおまえはダメなんだ、だから二度と再びやろうと思わない方がいい〃という強烈な劣等感をうえつけて卒業させるのが学校の最大の特徴です。

何のためにあるんでしょうね、学校というのは。音楽劣等感とか、体育劣等感とか、数学劣等感、国語劣等感、英語劣等感とかを育てるには、非常にいい環境で、まちがいなくそうなるでしょうね、運動会で一番早く走ったやつは、競馬と同じ一番大きな賞品を与え、①と書いた旗に並べ、とか、二番目に走ったやつは、二番目に大きな賞品を、四番以下の人は負け馬だから家へ帰りなさい。というようなことをつい最近までやっていました、やたら早く走る子は、努力しなくても何しなくても、いつも早いんです。そういうふうに、できてるんです。ですから、白人は黄色人種より立派で、黒人というのは全然だめ、というのと全く同じ理屈なんです。

勉強でも、通信簿というのがありますが、格別努力しなくても5をとる子はいるんです。ですから、そんなものは全部やめて、学校というのは、その子どももっているいいものをうんと育てると同時に、他の子どもとのつきあい方とか、ふるまい

方だとか大事なことを、せつせとやって、精薄がきても、重症心身障害児がきても、植物みたいな人間がきても、それぞれのいいところを大事にして育てて、それぞれの関係がのびるような関係のつくり方を研究していくとか。それで毎日楽しく、お茶大幼稚園みたいに、それぞれ勝手なことをやっていて、しかもそれがおもしろくて、先生もそれを認めていて、友だちも、それぞれそういうことをやっている、というふうに学校がもしなれたらすばらしいと思うんですが……。

そのためには、たぶん学年とか教科とかおかしなことは、みやめていかなければいけないでしょうし、通信簿もなくなるでしょうし、むやみにしつけをすることをやめるとか、今もっている迷信をすべてすてなくちゃならない。ですからなかなかできないかもしれません。

〈人の養成〉

それで現実的には、どうしていくのかなとも思う訳ですが、一番やっぱり納得のいく方法は、子どもの自主性を尊重して、一人一人の子どものをよく見て、その子に即して、その子の指導法をその場で考えて、その子のいいものをのびるようにするということです、どこかでちゃんとできればいい訳です。結

局、そういうことのできる人の数をふやして、これから生まれる子どもたちが、そういう保育者にあたる率をふやすということじゃないだろうかと思えます。一番大事なのは、そういう保育者が養成されるような、実践の場をふやすことです。こういう現職研究会のような場が、どこにでも近くにあつて、人が集まってやっていくことによって、どんな人が育っていく方向に役立つ努力をしていかなければなりません。そして、私は大丈夫な保育者です、という保育者がどこかしらにいて、そういう先生に子どもがあたる率が多くなってくることが大切で、そのための対策を考えればいいのじゃないかなと思えます。

生涯教育なんていうことが最近出てきましたが、高校生ぐらいの年齢から何歳でもいいと思いますが、そこへきて、しばらく実際に動いてみると、子どもが見える人になってくるというコースをいっぱい作って、最初からある文部省の方針ばかりにこだわらないで、子どもを見て、その子に即して、その子の成長に役立つ動きのできる人を養成して、学校という刑務所の中や、幼稚園という牙城の中に送りこんで、その人にあたる率をふやしていくことが現実的なのかなあ、と思っています。幼児教育について、いつも一方では、畜生め、と思い、一方では、何とかしなきゃと思うし、自分としては、どういうふうに動い

たらいいのかな、ということを考えて、今の学校体制とか、学校の準備教育的幼稚園教育について、いつも義憤を感じているところです。
(お茶の水女子大学)

シンポジウムのお知らせ

二月号で予告いたしました「保育のこころを語る」シンポジウムを左のように開きます。多数のご参加をお待ちいたします。

日時 三月二十八日(火) 午後一時—四時

場所 お茶の水女子大学附属幼稚園

講師 周郷 博先生 津守 真先生

遠藤悟朗先生 外山滋比古先生ほか

司会 本田和子先生

会費 一名五百円

申込 参加ご希望の方は、葉書で、氏名、住所、勤務先、同住所をお書きの上、三月十日までに、お茶の水女子大学附属幼稚園内みどり会宛、お申込みください。一枚に何名でも結構ですが電話でのお申込みはお受けいたしませんのでご諒承ください。

みどり会研究部